

ダンテにおける「テキスト」の記憶と「出来事」の記憶について語ります。資料1をご覧ください。[引用]「わが記憶の書のあの部分には、朱文字で『幼年期』と書き記(しる)されており、そこより先はほとんど読むこともできない。そして、この朱文字の題の後(あと)には記録の文字が見出されるが、それをこの小冊子に書き写すのが私の意図するところなのである。すべてとは言わないまでも、せめて大意なりとも」[引用終]。いま紹介した資料にあるように、ダンテは記憶を書物としてイメージしておりました。ダンテの記憶の中には、読まれた書物＝「テキスト」が含まれておりましたし、実体験したり見聞きした「出来事」が比喩的にページ化されて「記憶の書」に含まれていたのでしょう。「小冊子」たる *Vita Nuova* に即して言うならば、ダンテの記憶には、自分がかつて書いた韻文作品の「テキスト」が含まれていたし、その「テキスト」を生むきっかけとなった「出来事」も含まれていたことでしょう。

研究者は、実証的な成果をあげるためには、ダンテが書き残していった作品の中に残る「テキスト」の記憶を探し求めてゆくこととなります。文芸用語で言うならば、「テキスト相互性」(intertestualità)を追い求める研究が、ダンテへのアプローチの中心となるということです。私も例外ではありません。ダンテが生きていた中世に視野を限定するならば、ラテン語による書物、フランスのオイル語、オック語で書かれた作品、イタリア半島の先行詩人たちの産物が、ダンテの記憶に刻まれていたことでしょう。アンドレアス・カペラーヌスやトリスタン伝説、アルナウト・ダニエル、ジャコモ・ダ・レンティーニなどとの関連について、私が書いたものは、著作権による制限がない限り、すべて「リサーチマップ」<sup>1</sup>に掲載されておりますので、ここでは繰り返しません。本日は、むしろ、ダンテの記憶に残っていた「出来事」について、語りたいと思います。しかし、700年以上前に生きていたダンテに接近しようとする私たちは、皮肉にも、書かれたもの＝「テキスト」に頼らざるをえません。

\*

資料2にあるように、オルランドはピレネー山脈に位置するロンチズヴァッレで戦死しますが、その際に角笛を吹き鳴らし、自分の危機をカルロ大帝に知らせます。このエピソードを、ダンテは『ロランの歌』を自ら読んで知っていたか、あるいは他人から聞いて知っていました。資料2を読んでおきます。「あの[ロンチズヴァッレでの]悲しい大敗で、カルロ大帝は聖なる騎士らを失ったが、オルランドといえども、あの敗北のあと、これほど凄(すさ)まじくは[角笛オリファンテを]吹き鳴らさなかった」[引用終]。資料3には、『ロランの歌』の関連箇所が挙げられています。東京イタリア文化会館で本年6月に行われた講演では、このオルランドから話を始めましたが、本日はオルランドの義父ガーノから話を始めます。ガーノはスペインのサラセン教徒と密約を結び、スペイン軍に襲撃されてオルランドが戦死するようにした張本人です。資料4にあるように、ガーノは祖国を裏切った者として、地獄の第9圏で罰せられています。注目すべきは、ガーノがいかにか描かれているかという点です。[引用]「思うに、[皇帝派を裏切り教皇派になった]ジャンニ・デ・ソルダニエーリは、もっと向こうの方にガーノやテバルデッロと一緒にいるはずだ。人が眠っている間

1. <https://researchmap.jp/read0008141/>

にファエンツァの門を「敵のために」開け放った、あのテバルデッロだ」[引用終]。ガーノは「裏切者」の代名詞＝「範例」(exemplum) だったと見えて、一切の説明なしに簡略に導入されています。評論家としてのT・S・エリオットは、ダンテの特徴として「簡潔さ」を指摘し、詩人としてのエリオットが、この「簡潔さ」を真似ようとしても、なかなかうまくゆかなかったと述べています<sup>2</sup>。私の視点に惹きつけて言えば、ダンテの「簡潔さ」は、資料4にあるような、「範例」を用いた凝縮した表現に、原因のひとつを持っているように思われます。

注目すべきは、ガーノと結びつけて言及されている、13世紀イタリアのソルダニエーリとテバルデッロです。今日、文学通ならばガーノが誰か熟知している可能性も高いでしょうが、ソルダニエーリとテバルデッロについては、『神曲』の読者の大半は、註釈の助けを借りねば理解できないでしょう。それゆえ私たちは、ダンテおよびその同時代人の記憶に刻まれていた「出来事」を求めていかざるをえません。この場では、ソルダニエーリは省き、ファエンツァと結びつけられた裏切者＝テバルデッロに限定いたします。

「出来事」を知るために役立つ「テキスト」は、『ランベルタッツィ家とジェレメーイ家についてのセルヴェンテーゼ』(Serventese dei Lambertazzi e dei Geremei) と題された、エミリア・ロマーニャ方言で書かれた韻文作品<sup>3</sup>です。ランベルタッツィ家はボローニャにおける皇帝派、ジェレメーイ家は教皇派を意味します。資料5に「これが、ボローニャの街の破壊の始まりであった」とあるように、両派の争いはボローニャにはよい影響を持ちませんでした。両派の対立は、ボローニャの捕虜となっていたサルデーニャ王エンツォの処遇をめぐることで起こりました。資料6に詳しく補足説明を書きおきましたが、調停の試みにもかかわらず、皇帝派(ランベルタッツィ派)は1274年と1279年の2度にわたって、近隣のファエンツァに退去せざるをえませんでした。2度目に退去した際に、皇帝派はテバルデッロの機嫌を損ねてしまったようです。資料7にあるように、皇帝派はテバルデッロの家畜小屋から去勢した豚を1匹盗み出し、遊興します。資料7を読んでおきます。「彼らは、テバルデッロに対して悪巧みを立て、夜になって彼が眠ったら、その家畜小屋から去勢豚を1匹盗みとられるようにした。…テバルデッロはそのこと [=豚が盗まれたこと] を知ると、彼らにあらゆる香辛料を提供するように[召使らに] 命じた。悪ふざけとして、香辛料を出させたのであった。テバルデッロは、盗まれた豚のことなど気にもかけていないようだった。それどころか、道を歩んでゆく時には、彼らと楽しんでいるようだった。しかし、テバルデッロは彼らに対して策略を練った。お聞きください」[引用終]。憤慨したテバルデッロは教皇派(ジェレメーイ派)と結託して、ファエンツァから皇帝派を排除する策を練ります。資料8-9は、テバルデッロと教皇派(ジェレメーイ派)の交渉の様子です。資料9に補足説明を付けておきましたが、ジェレメーイ派はファエンツァを明け渡すというテバルデッロの提案に魅了されました。しかし、用心深く人質と保証金を要求し、テバルデッロは進んで要求に応じました。人質は、ボローニャに到着すると、ジェレメーイ派の攻撃を促します。促されて、

2. Cfr. Thomas Stearns Eliot, *Dante*, London, Faber & Faber, 1930, pp. 35-36: «... the simple style of which Dante is the greatest master is a very difficult style. In twenty years I have written about a dozen lines in that style successfully» (his italics).

3. Armando Antonelli, *Sulla datazione del Serventese dei Lambertazzi e Geremei*, «Medioevo letterario d'Italia» 13 (2016), pp. 9-29によれば、『セルヴェンテーゼ』は14世紀後半の作品だとされる。しかし、『セルヴェンテーゼ』の主題は13世紀後半のボローニャにおける党派抗争である。

ジェレメーイ派は急ぎファエンツァに向かうわけですが、資料10を読んでおきます。「そこで、遅れることなく、騎士や歩兵らは迅速に馬を飛ばし始めた。彼らは街にたどり着くと、門の中に入り始めた。テバルデッロは護衛らとともに中にいたが、門の鎖を断ち切り、すばやく斧で門をうち倒した。彼はすべての街区を封鎖した。皇帝派の者どもが、自分の身を守ることができないようにするためだった。ボローニャの者らが街の中に入り始めた。皇帝派の者どもがこの知らせを聞くと、すぐに鐘を打ち始めたが、あの邪悪な者どもを集合させ、統率することはできなかった」[引用終]。テバルデッロがジェレメーイ派に門を開け放ったのは、1280年11月13日夜だとされています。テバルデッロの計略は思案していたように運び、皇帝派はファエンツァを去ってフォルリに向かいます。資料11を読んでおきます。「ランベルタツツイ派の者どもには、豚を使った腸詰や焼肉は、あまりに高い出費となった。テバルデッロ殿の家畜小屋から、彼らとその豚を連れ去ったのだった。ランベルタツツイ派はフォルリの方に退散したが、隊列も整えられず、旗も小旗も失っていた。加えて、子羊が母親を追いかけてするように、泣きながら逃げ去った」[引用終]。資料11が7と呼応関係にあることは、言うまでもないことでしょう。

\*

さて、ジェレメーイ派の軍勢には、アルベルト・デ・カッチャネミーコが含まれておりました。その勇猛さを描いた一節＝資料12を読んでおきましょう。「アルベルト殿がそちらに赴き、[ランベルタツツイ派の] ルッフイーノ・デ・プリンチピを掴むと、彼を馬から引きずり下ろし、その馬をとり、[落馬した] グイドッティーノ殿にあたえた。グイドッティーノ殿はすぐに馬に跨った。すると、教皇派の者らがすばやく寄り集まり、たちどころに皇帝派に打ちかかり、その党派の者どもを多く殺害した」[引用終]。ダンテは「地獄篇」第18歌に、このアルベルトの息子ヴェネーディコを登場させ、姉妹ギゾーラに体を売らせた女衞として罰しています。彼女を買ったのはエステ家の侯爵<sup>4</sup>でしたが、資料6の補足説明にあるとおり、エステ家はボローニャの党派抗争とも密接に関わっておりました。このヴェネーディコについて、『セルヴェンターゼ』は（少なくとも現在残存している形では）何も語っていません。テバルデッロへの言及がある「地獄篇」第32歌が、『セルヴェンターゼ』すなわち「テキスト」の記憶に基づいているとしても<sup>5</sup>、ヴェネーディコの記憶は「テキスト」に基づいているのか「出来事」に基づいているのかは、必ずしも明確ではありません<sup>6</sup>。少な

4. Obizzo IIないしはAzzo VIIIのこと。Cfr. Sapegno: 210.

5. 註3で述べたアントネッリの提案が正しいとすると、ダンテは「テキスト」としての『セルヴェンターゼ』には、触れえなかったことになる。この場合、『セルヴェンターゼ』は、ただ擬似的にのみ、ダンテの「出来事」を再構成することになる。

6. オピッツォ・デステ（1247年頃-1293年）の死に関しても、ダンテの「材源」が何であったのかは、判定が難しい。これについては、「地獄篇」第12歌110-114行（Sapegno: 145）を参照のこと。

«...金髪の別の男は、オピッツォ・デステだ。この男は、実際のところ、現世では継子に消されたのだ。»その時、私は詩人の方を向いたが、彼は言われた。「今はこの者を優先せよ、私はその次で十分だ。」  
... e quell'altro ch'è biondo, / è Opizzo da Esti, il quale per vero / fu spento dal figliastro su nel mondo. -- / Allor mi volsi al poeta [= Virgilio], e quei disse: -- Questi ti sia or primo, e io secondo. --

この箇所では、ダンテはどちらの情報を優先すべきか迷っている。ウェギリウスは、ネッソの言葉を尊重するように促している。

くとも、現在までは参照すべき「テキスト」は見出されておられません。「地獄篇」第18歌の書き方からは、ダンテは噂に聞いた話を記憶していたと考えたくはなりません。資料13を一部だけ読んでおきます。「私は、[姉妹の]美しいギゾーラを操り、侯爵の欲望を満たしてやるよう仕向けたあの男だ。[この先、注意!] その淫(みだ)らな話が[世の中で]どのように語られているにせよ」[引用終]。

『セルヴェンテゼ』とダンテの関わりについては、もうひとつ指摘をしておかねばなりません。『セルヴェンテゼ』では、皇帝派・教皇派間の緊張が高まった段階で、総督ベルナルド・オルシーニ(教皇ニコラウス3世の甥)がボローニャの名家に語りかける場面=資料14があります。一方、ダンテは「天国篇」第16歌で、自らの高祖父カッチャグイーダに頼み、いにしえのフィレンツェの名家について語らせます。『セルヴェンテゼ』も「天国篇」も、固有名詞の長いリストを含んでいるわけですが、読み比べることによって、両者の特徴(文体の差)が明確となることでしょう。その作業は、各人に任せることにします。私としては、カッチャグイーダが示すリストには、フィレンツェにおける皇帝派・教皇派の分裂の原因となった、ボンデルモンテが含まれているという点に注目しておきます。資料16を読んでおきます。「ああボンデルモンテよ、人から勧められて、おまえがその[アミデーイ家との]婚姻を避けたのは、なんと不幸なことだったろう」[引用終]。

\*

ボンデルモンテが党派争いの種を蒔いたことについては、資料17-20まで参照すべきものが多くありますが、ダンテの記憶に刻まれていた「テキスト」がどれであるのかは、必ずしも判然とはしません<sup>7</sup>。資料17-20は細部では微妙に「ズレ」ておりますが、共通点を要約すると、ボンデルモンテはアミデーイ家から妻をとることになっていましたが、突如婚約を破棄し、別の女性と結婚しようとしています。恥辱を受けたと感じたアミデーイ家は門閥・朋友会議を開き、対応を検討します。この会議で、モスカ・デ・ランベルティは「始まってしまったことは、行き着くところまで行かねば終わりにならない」(Capo ha cosa fatta)と格言を述べて、仲間を促し、ボンデルモンテを殺害します。そして、事件は皇帝派と教皇派の激しい抗争に発展、フィレンツェでは平和が失われました。

アミデーイ家がどのような関係でウベルティ家と結ばれていたかは、資料17-20でははっきりしませんが、両家は密接な関係をもっていたようです。しかし、『ダンテ百科事典』(*Enciclopedia Dantesca*)で「アミデーイ」を調べると、“clientela”の関係に言及しており<sup>8</sup>、アミデーイ家が従順服従の態度を示すと、ウベルティ家は保護と恩恵をあたえていたものと思われます。大雑把な言い方をすれば、ウベルティ家が親分、アミデーイ家が子分の関係にあったのでしょう。資料20では、ボンデルモンティ家とアミデーイ家の不和ではなく、ボンデルモンティ家・ウベルティ家間の不和に置き換えられています。このウベルティ家は皇帝派のリーダーとなる名家ですが、その一員が「地獄篇」第10歌の登場人物のひとり=ファリナータです。2006年12月11日にイタリア文化会館で行われた「ダンテフォーラム」において、私は「地獄篇」第10歌について語り、ファリナータとイタリア史・トスカーナ史の関連

7. 資料17-20には、次のものは加えなかった。ダンテには読む可能性がなかったからである。Matteo Bandello, *Novelle*, I, 1, «Buondelmonte de' Buondelmonti si marita con una, e poi la lascia per prenderne un'altra, e fu ammazzato», a cura di Ettore Mazzali, Milano, Rizzoli, 1990, pp. 92-97.

8. Arnaldo d'Addario, «Amidei» (ED: I, 210).

については触れましたし、グイトーネがウベルティ家の活動をどのように描いているのかについても語りましたので、それらについての説明は一切省略いたします。

「地獄篇」第10歌は、ファリナータを姻戚関係で結ばれたカヴァルカンテと同じひとつの燃える棺に入れて罰しています。カヴァルカンテの息子ガイドはファリナータの娘と結婚しているので、ファリナータとカヴァルカンテが地獄の同じ場所にいることには、そのことが無関係であったとは思われません。ただ、注意しておきたいのは、「地獄篇」第10歌では、資料17-20のいずれもが語っている、モスカをファリナータと結びつけていないということです。この点に関するダンテの決定は、避けられないものだったのでしょうか。モスカは1243年には亡くなっているし、ファリナータが1260年モンタペルティの戦いで主要人物のひとりとして活動した時、ランベルティ家の人物として少なからず協力したのはゲラルドだったからです<sup>9</sup>。また、1248年に教皇派が追放された折にも、モスカにはもはや関与の仕様がありませんでした。しかし、ダンテがモスカのことを知らなかったわけではありません。資料21と22にあるように、モスカの名前は「地獄篇」に2度挙げられています。主人公ダンテは、第6歌でチャッコからモスカが地獄の深い場所に落ちていることを聞かされますが、その予告を実現する形で、第28歌でのモスカへの言及が行われます。しかも、モスカが不和を醸成した者として罰せられている地獄の第8圏では、あの不吉な格言“Capo ha cosa fatta”はモスカと切り離しえないものとして結びついています。ダンテは、モスカのことをよく知っていたということでしょう。奇妙なのは、「地獄篇」第6歌では、モスカに対する評価がきわめて高いということかもしれません。資料22を読んでおきます。「非常にりっぱであったファリナータ [・ウベルティ] とテッギャーイオ [・アルドブランディ・アディマーリ]、ヤーコポ・ルスティクッチ、アッリーゴ [・フィファンティ]、モスカ [・デ・ランベルティ]、よき行いをするに才知を傾けたその他の者たちは、教えてくれ、どこにいる。彼らのことを知らせてくれ」[引用終]。ちなみに、この一節は、資料17-20で言及されている3つの家の人物を挙げています。また、ファリナータとモスカが接近した形で提示されていることは、資料23との連想を働かせます。そこでは、カッチャグイーダが3行でふたりの一族について触れています。[引用]「ああ、高慢さゆえに壊滅した [ウベルティ家の] 者どもが、どのようにしているのを、私は見たことだろうか。そして、[青の背景に描かれた] 金色の円 [=ランベルティ家の紋章] が、すべての重要な出来事においてフィレンツェに栄光をもたらしていた」[引用終]。

ファリナータは地獄の第6圏、モスカは第8圏で罰せられています。ダンテが二人を分離した形で地獄に配していることには、地獄における罪の分類体系が絡んでいたことでしょう。ファリナータを特徴づける「魂の不死を信じない」という罪は、モスカを特徴づける「不和」という罪とは同じ場所に配することができません。さて、ダンテは読者が頭の中で、第10歌と第28歌を結びつけ、トスカーナ地方における皇帝派というコンテクストに二人を位置づけてくれることを期待できたのでしょうか。読者がダンテの同時代人ならば、この期待はおそらくは実現されたことでしょうか。しかし、今日の読者、しかも東洋の端で『神曲』を読む者には、第10歌と第28歌を結びつけて考えることは、なかなか容易ではありません。しか

9. A. d'Addario, «Lamberti» (ED: III, 557-558 [558]). ダンテは、モンタペルティの戦いでフィレンツェ教皇派軍に対して裏切を働き、皇帝派の勝利に寄与したボッカ・デッリ・アバーティについては、「地獄篇」第32歌73-123行で語っている。

し、『神曲』との親しみを深めるためには、ダンテが実体験したり見聞きした歴史を知ることとは不可欠でしょう。歴史の知識がなければ、詩人の心に刻まれていた「出来事」に接近することなどできません。皮肉なことに、「出来事」への接近を困難にしているのは、今日と13-14世紀を隔てる時間というよりは、むしろ『神曲』という「テキスト」自体なのかもしれません。なぜなら、それはダンテが知り生きた「現実」を裁いたものだからです<sup>10</sup>。言い換えれば、詩人が語る「あの世」とは、「現実」に価値判断を加えて分解し、断片化したものを寄せ集めて再構成したものだからです。この「現実」、言うならば「究極の現実」を、ダンテは「範例」を用いるなど、簡略に表現してゆきます。再構成の結果、『神曲』では、ガーノ（伝説）とテバルデッロ（歴史）が近くに並べられたり、ファリナータとモスカが遠く隔てられたりします<sup>11</sup>。

『神曲』という「テキスト」の理解を深めるために、ダンテの記憶に刻まれていた「出来事」を発掘してゆくことが必要であるならば、すでに冒頭で指摘したように、その発掘は、逆説的なことに、私たちが「テキスト」を繙くことによるのみ可能となることでしょう。ダンテ歿後700周年の記念行事である今日のこの場には、イタリア語の知識を有する研究者が集っているわけですから、次のように助言します。ボンデルモンテに関する資料17-20を、また報告の前半部で触れた『セルヴェンターゼ』を、お読みください。それらの資料が、ダンテの記憶に刻まれた「テキスト」であるという保証がなく、たとえ「テキスト相互性」が問題にならないとしてもです。エリオットは、ダンテの凝縮された3行の解説に1段落あるいは1頁が必要な場合もあると述べておりますが<sup>12</sup>、ガーノとその仲間たちに関する2行について、私の解説はここで終わります。ご静聴に感謝いたします。

---

10. 「最後の審判」は、肉体の復活によって、与えられた罰と至福を増大することができるにせよ、『神曲』における地獄と天国は、すでに最終的な審判を受けた者たちの場である。これとの関連で読んでおくべきは、「地獄篇」第6歌103-105行でダンテがウェルギリウスにする、「師よ、重大な[最後の]審判の後では、これらの苦しみは増大するのですか、減少するのですか、同じほど苦しいのでしょうか」(Maestro, esti tormenti / crescerann'ei dopo la gran sentenza, / o fier minori, o saran sì cocenti?) [Sapegno: 80]という質問であろう。また、「最後の審判」以降は、煉獄は存在しなくなる。

11. 「伝説」と「歴史」の組み合わせに関しては、たとえば「地獄篇」第28歌1-18行、同歌136-138行、第30歌100-129行等を参照されたい。第30歌の例では、贖金づくりをしたアダーモ（13世紀）とトロイアに木馬を受け入れるように説得したシノー（ギリシャ人）が口汚く罵り合う。

12. T.S. Eliot, op. cit., p. 17: «I do not mean that he [= Dante] writes very simple Italian, for he does not; or that his content is simple or always simply expressed. It is often expressed with such a force of compression that the elucidation of three lines needs a paragraph, and their allusions a page of commentary».